

5. 合宿をおえて

1. はじめに

1.1 合同合宿の目的および位置づけ

98年12月4日～6日、国立妙高少年自然の家で、新潟大学教養教育「日本事情人文系」および「異文化コミュニケーション演習」履修学生の参加による合同合宿をおこなった。合宿には、新潟大学と同じように経費を得た秋田・信州・福井大学の学生が参加した。また、外部講師として明治学院・和光・弘前大学の教員を招き、各大学の引率教員をあわせて、参加者は約90名であった。この合宿では、テーマを「文化違って何？」と定め、参加者全員がテーマについて考え、話し合い、行動することを通して、参加者同士の異文化理解、大学間交流を深めることを目的とした。

以下に、学生および引率教員がこの合宿にどのように参加し、また何を感じまなびとったかを、新潟大学の事例を中心に報告する。

1.2 合宿に到る経緯

この項では、合宿実施に到った経緯について、述べる。

新潟大学では、93年度より教養教育において、異文化理解を目的とした、留学生・日本人学生の合同授業を実施している。この授業は、留学生むけの日本事情科目が出発点にある。留学生が履修すると「日本事情人文系」として単位が認定され、日本人学生が履修すると「異文化コミュニケーション演習」として単位が認定される(土屋 1995)。

97年度、文部省科学研究費の助成が認められ、新潟大学とおなじ趣旨で授業を実施してきた秋田・信州・弘前・福井大学の教官と共同で、それぞれの授業の実践報告をしあい、教育内容や評価方法などの問題を総体的に整理分析することになり、3年計画で研究をしている。共同研究を始めるにあたって、「日本事情」の授業の

ひとつの形態として、様々な背景をもった学生が参加し、ディスカッションやグループアクティビティをとおして、異文化理解教育をおこなうクラスを「多文化クラス」と名づけた。授業開設当初、参加者は留学生・日本人学生が中心であったが、大学入学選抜の多様化にともない、中国引揚者等子女、社会人入学者など多様化してきており、クラスが多文化性をおびてきているということで、多文化クラスという名称をつけたのである。そして、単独の大学内での授業実施にとどまらず、大学をこえた多大学との相互交流、さらには地域との交流をめざしている。

その多文化クラスの大学間交流の第一段階として、97年度後期、各大学のクラスで学生たちが共同作業をおこない、作品(ビデオ、ホームページ、パンフレット等)を作り、できあがった作品に対して、5大学間で相互にコメントするというプロジェクトをこころみた(土屋他 1998; 土屋・押谷 1999)。

次に、98年6月には、SCSの設備のある新潟、弘前、信州大学で、多文化クラス受講生による多文化クラスについての合同ディスカッションをおこなった。夏やすみにSCSで知り合った学生のところをたずねるといような交流が学生間でうまれた。しかし、機械を通してではなく、直接に会いたいという強い要望があり、合同合宿の実施にいたったのである。

1.3 合宿実施準備

さて、以下に、合宿実施にあたっての準備経過をのべる。

98年5月、平成10年度教養特別講義プログラム推進経費で多文化クラス受講生の合宿を計画し、予算申請をした。夏期休暇中、予算が通ったとの知らせをうけた。幸いにも、新潟と同時期に申請した秋田、信州、福井大学も予算が通ったので、4大学合同で実施することになった。地理的条件・人数・予算の面で検討した結果、合宿場所を国立妙高少年自然の家と決定し、そ

の後、日程の調整をおこない、実施時期を12月第1週の金・土・日とした。

教員が直接会っておこなった打ち合わせは、9月末に1回、11月に3回（合宿場所の下見1回をふくむ）であり、その他は電子メール等でやりとりした。大人数での合宿となるので、学生の安全を第一に考え、その上で、学生が自由にのびのびと行動できるよう、スタッフが話し合った。その結果、合宿の意義について以下のような見解を得た。

合宿という「場」が非日常的であることに加えて、複数の大学が集まることで、多様性がうまれ、学生達の視野が拡大することが期待される。そうした「場」でみんながいっしょに何か生産的な活動をおこなう。そこから、知識を得るだけでなく、何かを感じとって、それぞれの日常の「場」にもってかえる。何かとは文化的多様性であり、各個人の文化的アイデンティティであり、ひいては自己理解につながる可能性をもつものである。それは、教師が学生の手をとって導くのではなく、学生が自主的に気づくべきものである。

以上の見解に基づいて、合宿のテーマを「文化差って何？」とさだめ、そのテーマについてグループにわかれて、共同作業をおこない、最終的には「文化差」祭と称して、各グループで話し合い、行動した成果を発表するというようにした。

2. 合同合宿日程

本合宿は、以下のような日程でおこなわれた。

12月4日（金）

- 14:15 新潟大学留学生センター前に集合
- 14:30 貸し切りバスで出発
- 18:00 国立妙高少年自然の家到着・夕食
- 19:00 休憩
- 19:30 事務連絡・大学紹介アクティビティ
 - ・この時間は、スタッフ紹介・日程説明・宿舎の使用上の注意、等の事務連絡のほか、各大学の学生が、自分たちの大

学を紹介するアクティビティをおこなった。紹介の形式は自由とし、各大学の学生に任せた。紹介アクティビティの立案と練習は、バスで少年自然の家に向かうまでの時間を充てた。

20:30 入浴・自由時間

22:00 就寝

12月5日（土）

08:00 起床・朝食

09:30 午前の活動

- ・明治学院大学、井上孝代教授による、異文化コミュニケーションに関するワークショップ

12:00 昼食

13:30 午後の活動・「文化差」祭に向けての共同作業

- ・全学生が、大学・国籍・性別が偏らぬように編成された9つのグループに分かれ、それぞれのグループが、「文化差」を表現するためのものを共同作業によって制作した。表現のために必要と思われる素材（模造紙・マジックインキ・色紙・文房具・コンピュータ等）は各大学から持参し、表現の題材・形式はすべて学生が討論によって決めた。また各グループには5大学の教員が1人ずつ担当ファシリテータとしてついたが、各教員が作業にどのように・どの程度まで関わるかについても教員自身に任された。また土屋は、全体の統括役としての役割を果たすため、学生のグループは担当しなかった。

17:00 休憩・移動

17:30 夕食

19:00 夜の活動・成果発表

- ・各グループが、昼の作業で作成した成果物をそれぞれ発表した。発表の司会・進行等も学生がおこなった。発表の内容は以下の通りである。

- 第1班 日本のここが変——「すみません」と「いらっしゃいませ」
- 第2班 プロポーズいろいろ
- 第3班 お金が落ちているのをみつけたら（寸劇と調査発表）
- 第4班 私の家は世界一
- 第5班 カエルの歌
- 第6班 ものの見方
- 第7班 愛の告白
- 第8班 影絵とパントマイムによる留学生日記
- 第9班 劇中劇・ディスカッション「鱶の川」

発表を見た全員が、他グループの発表に対し短いコメントを書いた。かつ全発表がおわった時点で、「どのグループの発表がいちばん良かったか」という人気投票をおこない、上位のグループを表彰した。

22:30 入浴・自由時間

12月6日（日）

07:30 起床・朝食

08:30 解散式

09:00 少年自然の家出発

12:30 新潟大学 到着・解散

3. 学生の変化（アンケート回答から）

この項では、合宿の初めと終わりに学生におこなったアンケート調査の一部を紹介する。

3.1 アンケートの目的

1.1および1.2で述べたように、この合宿は、「多文化クラス」の一環としておこなわれており、「多文化クラス」の目的は、様々な背景をもつ学生が、様々な活動を、文化の違いを越えて協力しておこない、お互いの理解を深め合うことである。このような交流に対する態度は、合宿の前と後で変化しただろうか。交流に対する態度の変化、合宿に対する期待の達成度などを振り返ることにより、合宿の効果を明らかに

することがアンケートの目的である。

3.2 アンケートの方法

アンケートの内容は、

- a いろいろな大学や国の人と交流することに対する自分の意欲、自信、興味、不安の評定を、7段階の選択肢から選ぶ（合宿前・合宿後）
- b 合宿に対する期待の自由記述（合宿前）
- c 合宿に対する期待の達成度を4段階の選択肢からえらぶ（合宿後）
- d 普段の授業と合宿の違いの自由記述（合宿後）
- e 合宿で何を学んだか自由記述（合宿後）

の5つである。（appendix 参照）合宿前と合宿後に用紙を配付し、記入後に回収して大学に持ち帰り、集計した。参加者68人の中で、有効回答は58（うち新潟は17）であった。

3.3 結果と考察

ここではa、の交流に対する態度の変化についてのみ述べる。学生が選んだ7段階の評定を点数化すると、参加者全体の交流に対する意欲、自信、興味はいずれも高まっており、不安は減っている。そのうち交流に対する自信と興味の増加および不安の減少は、統計的にも有意であった。（ $p<0.01$ 、片側検定）

一方、新潟大学の参加者のみを見ても変化の傾向は同じであり、交流に対する自信、興味は合宿後増加しており、不安は減少している。意欲に関してはあまり変化がみられなかったが、これは合宿前の平均がもともと高いこと（7段階評定における平均が6.4）と、サンプル数が少ないことによるものと思われる。不安の減少は、新潟大学の参加者においても有意に差が見られた。（ $p<0.05$ 、片側検定）

この結果から、合宿の参加者は、異文化との交流に対してもともと意欲的な集団であり、大学の違い、文化の違いを越えて様々な活動をとりにした結果、交流に対する自信・興味はいっそう増加し、不安は解消されていることが分かった。このことは、多文化クラスの一環である

合宿が、異文化に対する交流の態度の変化に、肯定的な影響を与えたことを意味している。

4 教師の役割

合同合宿では、午前中は、文化のちがいのものは、国籍とか民族ではなく、個人個人によるものだということに気づき、午後は、その差をのりこえて、グループでまとまってひとつのものを発表しようとする、一見、矛盾とおもえることをおこなった。その上、時間内にまとめあげなければならないという困難をせおっていた。ここで論ずる教師の役割というのは、主に、午後のグループにわかれてから、各教師がグループ担当者として、上記のような条件下で、どのような役割をはたしたかということである。主役は、あくまでも学生であり、教師は黒子役である。黒子でありながら、グループ全体を進行させ、アクティビティをオーガナイズしていかなければならない。そのうえ、学生達一人一人の気づきをうながすということも教師の役割である。このように教師は常に、自分で自分を上手にコントロールしていかなければならない立場におかれていた。教師の領分はどこまでか、非常になやみおき役割であった。

以下、宇佐美・押谷・足立が担当したグループの共同作業の経過を報告し、グループ活動における教師の役割について考察する。宇佐美・押谷は合宿終了後、グループ活動をふりかえって記述した。足立は、学生の許可をえて、教師としての足立の発言をテープに録音し記録をとることをこころみた。足立の記述は、その記録に基づいてなされている。

4.1 グループ共同作業観察

4.1.1 宇佐美担当

参加者：信州大 S (男)、T (男)、K (女)、秋田大 O (男)、L (男)、福井大 M (女)、新潟大 Y (女)、I (男) の 8 名。このうち留学生は、秋田大 L (中国)、新潟大 Y (韓国)、I (ロシア) の 3 名であった。

最初に、筆者が「導入」ともいうべきことをおこなった。まず、決めなければならないことはふたつある、ひとつは「何をするか」、もうひとつは「どのようにするか」、そして、効率的に作業を進めるためには、「何を」と「どのように」のどちらかを先に決めてしまったほうがいいのではないかと提案し、あとは学生に任せると宣言した。司会は特に決めなかった。

すると新潟大学のロシア人留学生 I が、「それぞれの大学が異文化の授業でやっていることを発表してはどうか」という提案をおこない、これに答えて各学での授業の紹介が順になされた。ひと通りの紹介が済んだところで、信州大学の K から、「方言」についての調査はどうか、という提案があった。ここで、自然と「何を」の方を先に話し合うような流れとなった。

しかし大学によっては、いわゆる「地元」の人間が非常に少ない、ということもありうるだろう。大学のある土地でならともかく、合宿という場で方言の調査をおこなうのはむずかしいと思われた。筆者がその点を指摘すると、学生も納得した。

その後は、「習慣」「食べ物」など、ブレインストーミング的にさまざまなテーマが出ていたが、そのうちに新潟大の I が再び、「反応の違い」はどうか、という重要な提案をした。つまり、「同じ状況に置かれたとき、どう反応するかは文化によって、個人によって違う、その違いを扱えばいいのではないか」ということであった。

この I の提案に触発され、1.「知らないことばで話しかけられたとき」、2.「知らない異性に話しかけられたとき」、3.「お金が落ちていたとき」にどうするか、などの案が出た。特に多数決をとることはしなかったが、I が「お金」というテーマを推し、他のメンバーもこれに賛同したため、この時点でメインテーマが決まった。

筆者はここで、「このテーマなら寸劇とアンケートの調査発表を組み合わせでおこなうこと

ができるのではないか」という提案をおこなった。つまり、調査結果の発表だけだと学会発表のようでつまらないので、結果発表の前に同じテーマで寸劇をやれば、観客の注意を引きつけることができるのではないか、という提案である。この提案は学生たちにも受け入れられた。

このあと、お金が落ちていたとき、自分ならどうするか、ということが、雑談的にメンバーの間で話し合われた。また、落ちていたものが貴金属だったら、さいふだったら、というように、落ちているものの種類が違った場合どうか、という話も出た。

このような雑談の中から、寸劇では「状況を同じにして、違う性格の人物を登場させ、性格の違いによって行動様式がどう変わるか」を表現することになった。具体的には、性格のちがう3人が落ちているお金を見つけ、拾うべきか拾うべきでないかあれこれ議論しているうちに、4人目の男が現れて何食わぬ顔で拾っていってしまう、という筋立てになった。

またアンケートでは、落ちているものが違ったときどのように行動様式が変わるか、を調べることとなった。また、性別・国籍・大学・教師か学生か、も聞き、これら回答者の属性によって結果を分析することとした。

ここでグループを寸劇班・調査班に分け、それぞれべつべつに作業を開始した。調査班は手書きで質問票を作り、全員からデータをあつめて表計算ソフトに入力、グラフを作って分析した上で、プレゼンテーションソフトを用いて発表をおこなうことにした。また寸劇班は練習しながら、脚本の細部を詰めることとした。筆者は調査班に付き添い、調査票の作成・表計算ソフトを用いての分析等にアドバイスをおこなった。

ここで秋田大の中国人留学生Lは、寸劇班に属していたが、表計算・プレゼンテーションソフトの使用経験者はかれ一人だけということで、データの入力やグラフの作成などに際しても大活躍をしていた。

調査結果は、回答者の属性ごとに比較対照することを計画していたが、結局大学ごとの比較をおこなうグラフを作成したところで時間切れとなった。そこで、これらのグラフを本番でどのように発表するかは、信州大学のSと福井大学のMとに一任し、筆者は一切関わらなかった。

4.1.2 押谷担当

この項では、押谷が担当したグループの共同作業の経過を報告する。メンバーは信州のU(男)、L(男)、A(女)、秋田のP(女)、福井のH(女)、新潟のS(男)、T(男)の7人であった。Lは韓国、Pはアメリカからの留学生である。

<シーン1>

全員がテーブルを囲む形で座った。教師の提案で自己紹介をはじめたが、みな言葉少な。誰かが日本の感想を留学生に聞くが、「日本には山がない」などという反応。これって大学に入るために初めての土地に移り住んだ日本の学生の感想と似てるよね、と教師が振るが、続かず。そのうちLが「日本の家は寒い」と発言し、Aが反応。「日本にもエアコンが完備していて、冬でも暖かい家もあるんだ」と多少愛国的になったようすでムキになるがLには通じず。じゃあ韓国の家はどうか？ 理想の家ってどんな家？とぼつぼつ発言が出始める。ここで教育学部で子供の課外活動のリーダーの経験があるHが、大きい模造紙にそれぞれ自分の(理想の)家を描こう、とアイデアをだす。そして描いた家の絵を重ねて壁に貼り、発表のときは、最初の学生が自分の家を説明し終わったら次の学生が「そんな家はダメダメ。私の家の方がいい家。」といいながら最初の学生の絵をピリッと破りすて、その下に現れた自分の絵の説明をはじめよう、終わったらその次の学生が前の学生の絵を破こう、とばたばた話が進むが、ここまで約30分足らず。活発なやりとりはほとんどなく、黙ったままの学生もいて計画に熱意が感じられないので教師が一言いってみる。「せっかく人が描いたものを頭からダメダメって否定するの？

それに破いちゃうのはもったいなくない？」これに対し、当初から教師がグループ活動の場にいる、ということそのものに不快感を隠さないAが、「みんながやるって決めたんだからいいじゃないですか」吐きすてるように囁く。この学生はシーン1、2を通して教師とのアイコンタクトをせず、コミュニケーションを避ける態度であった。とにかくはやいとこ始めよう、やらなければいけないことならとにかく早くやっつけてしまおう、という雰囲気。全員が大きい模造紙を広げられる場所ということで、プレイルームに移動した。この時点で、我々が一番早く話し合いを切り上げ、作業に移ったグループであった。

<シーン2>

みんな輪になって床に模造紙を広げる。女性A、P、Hは黙々と詳細な家屋の絵を描いていた。Aは石垣の上に建つ自宅を、中のエアコンもよく見えるように工夫して描く。Pも庭や自然環境に恵まれた広大なアメリカの自宅の絵。Hの絵は子供の頃住んでいた、今は建て替えられてしまった純日本風の家である。Lも少し悩んでいたが、韓国の家を描き始めた。U、S、Tは何をどう描いているのか途方にくれたのかポーっとしている。Tは持参のヘッドフォンで音楽を聞きながら折り紙をしている。全員全く無言。教師はこのまま何のインターアクションもなく作業が進むのかと恐れ、中間発表会を提案。何とか描きはじめたU、S、Tを含めて簡単に自分の絵の説明をしてもらおうが、お互いに興味を示さない。

<シーン3>

時間も押してきたので、発表準備に入ろうと教師の提案。会場の関係もあり破くのは止めにして、それぞれ作品(両手を広げてやっとして持てるくらい大きな模造紙)を持って7人が並び、端の学生から絵の説明をする。芸術的な純和風家屋を描いたHの番になる。鬼瓦にすだれ、縁側、風鈴、庭の石灯籠。説明はいきおい「日本では..」「日本の家は..」となる。それまで自信

なさそうにおとなしかったSがそれを聞いていて突然興奮したように言う。「あんまり日本、日本っていわない方がいいんじゃないかな。なんか変な感じがする。」そうだよ、みんな「日本」だから「アメリカ」だから一生懸命描いたんじゃないで、
「自分の家」だから一生懸命描いたんだよね、と教師は一人で感動するが、学生にめだつた反応なし。全体にあまりやる気のないような練習態度に、韓国のLが言い出す。「みんな絵をかくことだけが目的だったんじゃないでしょ。自分のが好き、日本であろうが、韓国であろうが、ひとり一人自分が持っている文化が好き、っていう気持ちを表わしたかったんじゃないの。そんな気持ちが全然伝わってこないよ。なんかおかしいよ。」うーん。他の学生より若干年令が高いLの気迫に「ウ、ウン、ソウダネ」といってしまったみんな。でも次の瞬間に、Lを除く全員で、「絵と絵のつなぎにダンスを踊ろう」という相談がまとまってしまった。呆然とするL。教師はここでは全く口を挟まず経過を見守る。

<シーン4>

ダンスの練習は、この作業中の一番いきいきしたシーンだった。絵を描いていた時とは別人のようになったTをみんなが「お師匠様」と呼びはじめ、彼の振り付けたステップを、音楽にあわせて一心に練習する。教師はひたすらCDの操作。作業中は決して教師と目をあわせなかったAが、「先生、もう一度かけて。」「先生もう一度」と笑顔で迫る。全員心が初めて一つになった時間であった。Lを除いては...。フォローアップインタビューのとき、Lは「僕の発言に『ウン、ソウダネ』とっておきなगरら、すぐ全く違うこと(ダンス)を始めたみんなにショックを受けた。日本語に自信がないので、ショックを受けた自分の気持ちもうまくみんなに伝えられなかった。」と語っている。ダンスは、それまでやってきた作業とは全然関係ないとLには映ったのである。上から与えられた「文化差文化祭」というテーマを真面目に考

え続けたしと違い、他のメンバーは「本当にやりたかったこと＝ダンス」と「やらなければならなかったこと＝文化差文化祭」を最後の瞬間あっけらかんとつなげてしまったのである。

4.1.3 足立担当

共同作業の話し合いにおける教師と学生たちの関わりについて焦点をおき、どのように筆者が学生たちとかかわったかを具体的にみていく。

以下はグループ別共同作業開始1時30分から4時すぎまで、学生たちと足立のやりとりである。
参加者：日本男子信州2名 日本女子信州2名
日本女子秋田1名 日本女子福井1名 アメリカ男子秋田1名 マレーシア女子新潟1名

・グループ活動の開始。

- 1) 足立：教師の発言部分だけ録音する許可を学生から得た。
- 2) 足立：以下2点を宣言した。a. 自分はオブザーバーで、基本的にはグループの話し合いや活動には介入しない。b. 話し合いがどうしてもうまく進行しなくなったりした場合、学生たちの許可を得てから助言する。

・全員、自己紹介

- 3) 足立：進行役、記録係をどうするのか学生に尋ねた。また、活動時間が非常に限られているのでスケジュールをたてるように提案した。

・進行役、記録係（進行役：日本人学生A、記録係：日本人学生B）が決まる

・紙芝居はどうかという意見、目にあらわれているものより、考え方のほうが大切だという意見、ことばのちがいについての発表はどうか、食文化についてや恋愛について、などさまざまな意見が出るがまとまらない。

・恋愛についてのアンケートをとろうという意見を進行役の学生Aが強く主張。特に反対する学生もなく、Aが強引にすすめていく。

- 4) 足立：手をあげ、学生に注意を促し「発言させてください」と言って学生の許可

を得てから、留学生Cが、日本人学生の話し合いを理解していないことを指摘した。理解していない学生の母語が英語なので、英語でも説明をするようにもう一人の留学生に提案した。また、全体の合意をとらずに一部の学生たちだけで話が展開していくので、全員の合意もとるように進行役に助言した。

- ・アンケート作成について話がすすむ。
- ・留学生Dは、テーマをかえたいと言い出す。
- ・他の日本人学生は、留学生Dの発言を聞いてはいるが、話があまりにも唐突なので、テーマにはふれず、恋愛についてのアンケート作成の話が続ける。

- 5) 足立：テーマを変えるのか変えないのか、全員の合意をとるように進行役に促す。

・学生たちはテーマを変えたいと言った学生Dを説得する。

・アンケート作成についての話し合いが続く。おもしろい内容を考えようとする。

- 6) 足立：学生にとっての「おもしろい内容」が、足立には表面的なものに感じられたので、文化差を知ってどうするのかを質問した。

・足立に対する答えを話し合う。

・目的が学生によって異なるので、具体的なアンケート作成ができない。

・進行役の学生Aが文化差について内面的なところから話しあおうとするが、学生の一人が時間がないと指摘し、「詳しい話は夜聞こう」と言う。

- 7) 足立：留学生Cが理解していないのではないかと指摘した。

・学生たちはやさしい日本語でもう一人の留学生Dに今まで決まったことを確認し、留学生Dが留学生Cに英語で伝える。

・日本人学生たちも留学生Cに、やさしい日本語や英語で説明する。

・進行役Aは、全員にアンケートを作ることを再確認する。

- ・アンケートの内容について話し合いが続く。
- ・自由記述のアンケートを作ろうという意見がある。

8) 足立：自由記述のアンケートは分析が困難だとアドバイスした。

- ・進行役Aは、アンケート作成について自分の意見を言いつづける。

- ・記録係Bが、全体発表にむけての方法を確立しようと提案する。

- ・進行役Aと記録係Bのやりとりがつづき、他の学生はだまっている。

9) 足立：進行役Aに他の人の意見も聞くように促す。

- ・進行役Aが進めようとした恋愛に関するアンケート作成に対して、他の学生たちが異論を述べる。理由は、恋愛観は、文化差ではなく個人間の問題だから。

- ・この他さまざまな意見がでて、恋愛に関するアンケートが却下される。

- ・進行役Aは、アンケート作成を実行するため、説得しようと個人的な雑談をはじめた。

10) 11) 12) 足立：時間がせまっていること、進行役はみんなの意見をきかなければならないなど、を告げた。

- ・留学生Dは留学生Cに今までの経過を英語と日本語で説明する。

- ・進行役Aは、「日本の習慣で変にかんじるものを寸劇にし、問題提起する」という学生Eの案と、「結婚に関するアンケートをとる」という案を提示この2つの方法のどちらかを選択するように他の学生たちに言う。

- ・他の学生たちは、みんなの意見がまとまっていないので選択できる段階ではないと進行役Aに抗議する。

13) 足立：進行役Aに、進行役としての進め方をアドバイス。

- ・恋愛についてのアンケートにすべきか、その他のことにすべきかもめる。

14) 足立：進め方や具体的なことを一つずつ決めるように指示した。

- ・進行役Aがもたつので、記録係Bが主導権を持ち始める。

- ・具体的に何をするのかについてみんなで例をあげる。「日本の変な習慣」などが例として挙がる。

15) 足立：学生に意見を求められたので、「日本の変な習慣」について発言する。

- ・何をするのかについて多数決し決める。

- ・この段階で記録係Bが完全に進行役にとって変わった。

- ・結局、寸劇をすることに決定。テーマは「日本のここが変」と決まった。

ここで初めて、全員が協力して具体的なドラマ作成の企画に入ることができた。ここから足立の発言はない。このあと、記録係Bがみんなの意見を聞きながら段取りを決め、各自がわかれて具体的な作業にとりかかった。残された時間は1時間足らずであった。

4.2 反省と改善点

この稿は、足立がグループ活動における教師の役割についての反省とその改善点をのべ、総括する。

1) グループ活動における目的の明確化

筆者は、今回限られた時間内に具体的な成果物を出すということに気をとられ、一番重要な目的であるグループ活動における学生間のやりとりに介入しすぎた。教師はグループ活動に限らず、学生の自主性を重んじる活動にかかわる場合、必ずその活動における目的を再確認すべきである。筆者は日本語教師であり、今後留学生と日本人学生のグループ活動にかかわることが多くなると考える。その際、異文化コミュニケーションは専門家に任せるという姿勢はもう時代おくれであると思う。日本語教師のみならず、どんな教師も、柔軟に学生の自主的な活動に対応できるようになるべきであると考えた。

2) 中立的立場の自覚

1) で述べた、目的の明確化ができれば、必然的に中立の立場をとることができる。今回筆者

は、進行役の学生に助言を与えすぎたと反省する。

今後、教師の発言がどのように学生たちに影響を与えるかということ強く自覚し、具体的な中立的立場について考えていきたい。

改善点は、以上の2点であるが、教師が自分で学生たちとのやりとりをふりかえることは非常に有益であった。また、教師も個人としてなんらかの内面的な変化を感じることができた。

5. 合宿を終えて

複数大学による合同合宿は、4.の「矛盾」ということばで代表されるように、まさに、二律背反の世界にあったといえよう。学生たちは、午前中のワークショップで、一人一人の個人差に気づき、あらたな発見だと認識したのが、午後になったら、今度はその差をのりこえ、ひとつのものにまとめあげなければならないという課題を与えられた。それも、はじめて知り合った人と議論をし共同で作業しなければならない。しかも、時間は限られているのだ。一方、教師の方も、学生の自主性を重んじ、なるべく口は出さないと考えていながら、学生にあれやこれや口をだしてしまうということを何度も経験した。指導にあたる教師は悩み多きものであった。しかし、この合宿は、それらを超えて、学生・教師双方に効果があり、かつ、期待にこたえるものであったといえる。

学生は、文化の異なった背景をもつ人々との交流に自信をもち、不安が減った。文化差は国のちがいと漠然と考えていたのが、個人の価値観のちがいによるのだと認識できた。それは、合宿直後より、時間を経た現在のほうが、思いが強くなっているようだ。教師は、大人数の学生を限られた時間内で指導する大変さを抱えながらも、学生の変化を目のあたりにすることができ、教師としての役割を再確認した。また、合宿の参加者として、教師自身の自己の成長も実感することができた。

このようなことが可能になったのは、合宿と

いう非日常的な場で、かつ新潟大学単独のみならず、複数大学の学生が参加したということが大きな意味をもっている。この合宿は、教養特別講義プログラム推進経費の目的である「教養教育の一環として、学生自身に自己と他者、社会との関係を自らの関わりにおいて総合的に省察させる機会を設けるため、多様なテーマのもと学内外の様々な関係者による特別講義を実施、自らの生き方を考える大学教育の充実」（平成10年4月15日付 文高大第258号「平成10年度大学改革推進等経費について（通知）」）に寄与するものであった。我々は、このような合宿を授業としてではなく、大学教育における最初のオリエンテーションとして実施することを提案したい。ひとつの大学や地域や国にとどまることなく、ドラスティックに変化していく地球社会を構成する一員として、学生のみならず教師もともに成長していきたいためである。

参考文献

- 井上孝代編（1997）異文化間臨床心理学序説。多賀出版
- 土屋千尋（1995）留学生・日本人学生混合クラスでまなぶ異文化コミュニケーション——「人生相談記事」を活用して——。日本語の研究と教育 窪田富男教授退官記念論集，専門教育出版，468-485
- 土屋千尋他（1998）多文化クラスの大学間および地域相互交流プロジェクトの実施と評価に関する研究。文部省科学研究費補助金研究成果中間報告書
- 土屋千尋他（1998）多文化クラスにおける共同作業の試み——大学間交流と相互コメント——。異文化間教育学会第19回大会発表抄録，92-93
- 土屋千尋・押谷祐子（1999）多文化クラスにおける学生の意識変化——共同作業をとおして学生はどうか変わったか——。第11回日本語教育連絡会議発表論文集，82-86
- 箕浦康子他（1998）日本人学生と留学生：相互理解のためのアクションリサーチ。平成7-9年

「文化差ってなに？」合宿アンケート

大学名前 _____

II. この合宿に期待することは何ですか。自由に書いてください。

1. この合宿に参加する今のあなた自身のことについて、教えてください。
質問を読んで、もっともよく当てはまると思う数字に○をつけてください。
数字と数字の間には○をつけないでください。

1 いろいろな大学や国の人と交流することに意欲がある。

たいへん ある	7	6	5	4	3	2	1
			どちらでも ない				まったく ない

2 いろいろな大学や国の人と交流することに自信がある

たいへん ある	7	6	5	4	3	2	1
			どちらでも ない				まったく ない

3 いろいろな大学や国の人と交流することに興味がある

たいへん ある	7	6	5	4	3	2	1
			どちらでも ない				まったく ない

4 いろいろな大学や国の人と交流することに不安がある

たいへん ある	7	6	5	4	3	2	1
			どちらでも ない				まったく ない

「文化差ってなに？」合宿アンケート

大学 名前

1. この合宿に参加した今のあなた自身のことについて、教えてください。質問を読んで、もっともよく当てはまると思う数字に○をつけてください。数字と数字の間には○をつけないでください。

1 いろいろな大学や国の人と交流することに意欲がある。

たいへんある	どちらでもない	まったくない
7	6 5 4 3 2 1	1

2 いろいろな大学や国の人と交流することに自信がある

たいへんある	どちらでもない	まったくない
7	6 5 4 3 2 1	1

3 いろいろな大学や国の人と交流することに興味がある

たいへんある	どちらでもない	まったくない
7	6 5 4 3 2 1	1

4 いろいろな大学や国の人と交流することに不安がある

たいへんある	どちらでもない	まったくない
7	6 5 4 3 2 1	1

II. この合宿は、期待どおりでしたか？

a. 期待以上 b. 期待どおり c. やや期待はずれ d. 期待はずれ

III. この合宿は、普段の授業とをくらべて、どうでしたか。自由に書いてください。

IV. この合宿で何を学びましたか。自由に書いてください。

V. この合宿に対する感想を自由に書いてください。何でもいいです。